教材名「米百俵」（学校図書６年 p.96，教育出版６年 p.63 ）

１．本教材について

▼「米百俵」は、作家山本有三が 1942(昭和 17)年に長岡で歴史的事実を取材し、同年５月にラジオ放送「隠れたる先覚者小林虎三郎」として発表した。翌年、戯曲「米百俵」を雑誌に掲載、これは同年６月に単行本となったが、６万部を出したところで軍部などの批判をうけ、発禁処分となった。この教材は、その作品を元にしている。

▼山本は単行本『米・百俵』（新潮社、1943 年）の初版はしがきにおいて、「『船をつくれ』『飛行機をつくれ』と、人々はおお声で叫んでおります…しかし、それらにも劣らず大事なことは、『人物をつくれ』というこえではありますまいか」と書いている。したがって、「米百俵」は、教育基本法第２条第５項「国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」にも合致するものである。

▼しかし近年、右派的な立場から「教育」を重視する目的でこれを取り上げたり、小泉純一郎首相が「聖域なき構造改革」を訴える所信表明（'01）において、「今の痛みに耐えて明日を良くしようという『米百俵の精神』」と強調したことで、この物語が広く知られることとなった。

２．本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

▼小泉元総理の「米百俵」のとらえ方を、あえて内容項目に当てはめるなら「主として自分自身に関すること－希望と勇気、努力と強い意志」に属することになる。ただ「聖域なき構造改革」を訴えるために彼がこれを利用したことは、同政策の問題点を不明瞭にした効果もあり、原作の矮小化と言うべきだろう。したがって、前述の意義ある観点からこの教材の積極面を再度位置づけし直し、指導案を作成することが可能であるし、また必要でもあると考え、第１の指導案を提案した。

▼ただ、この教材を扱う学校図書も教育出版も「集団と社会－国家と郷土」へと結びつけ、「公私」の対立に落とし込み、教育という「公」的利益と食料確保における「私」的欲求を対立させた上で、「公」に「私」を従属させようとする目的をもって編集していると思われる側面がある。とくに学校図書は、武士たちの「おおっ、これで久しぶりに米が食えるぞ」という台詞を載せ、「私」的欲求を批判し、「公」的価値へ結びつける方向へ誘導しようとしているように思える。ただ、ここで私たちが「私」的立場を擁護しても、あまり説得力は持たないと考える（参考資料ｂ）。むしろそれを克服するには、もうひとつの「公」を立ちあげる（第２の展開のようにインフラや医療を例示し、内容項目では「公正・公平・社会正義」の観点を加える）ことで、より普遍的な「公」をめざす「個」の確立が可能になると考え、第２の指導案とした。

▼この教材は、以上の２側面をもつため、合計２時間を使うことが望ましいと考える。

３．指導過程（第１）「主として自分自身に関すること」希望と勇気、努力と強い意志

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	教科書を読む。	教師が読んでも生徒が読んでも良い。
展開	１．「今ご飯を食べたい」という気持ちより、「教育の方が大切」という虎三郎の考えを、皆さんはどう思いますか？自分のこととして考えてみて、意見を出してみてくだい。 ２．子供たちが学ぶことは、自分のためだし、地域や社会のためになるというのは本当だろうか？　本当と思う人は、たとえばどんなことが考えられるか、手を挙げて答えてみよう。 ３.虎三郎は、教育が人の判断力を高めると述べています。現に虎三郎も、この話の中で、米百俵（100×１俵 400 合）を藩の人々（8,500 人）に分けるとすれば、１人あたり 4.7 合（1 合=約 180cc）＝847cc にしかならないと述べ、これを彼の判断の重要な根拠にしています。教室でも、その計算を実際に行って示し、計量カップなどで見せるなどすると効果的でしょう。 ４．本教材を載せた２つの教科書は、「戊辰戦争」の名前こそ出していませんが、長岡藩がこのとき幕府側に立って「戦い」をして敗北、今の苦しみを招いたことを書いています。	・全員に語らせることに努める。不登校気味な子どもにも考えさせたいが、無理強いしない。 ・算数（＝教育）の大切さ。学校図書にはこの数値が示されていて、虎三郎の「分けたらせいぜい１～２日で食いつぶすだけ」という主張に説得力を与えている。教育出版にはこの記述が欠けてるので、参考資料 a などで補う。 ・大局的な政治的判断の誤り（社会科の大切さ）。
まとめ	判断の誤りが人々を不幸にすることを、「展開」第３，４項を合わせて子どもたちに要約して示し、自分のためにも、みんなのためにも、しっかり勉強したいね、という形でまとめる	・教育は、未来をつくる。

3’．指導過程（第２）「集団や社会との関わりに関すること」公正・公平・社会正義

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	前回は、皆さんが勉強して立派な人に育つことは、自分自身のためだけでなく、社会のみんなも幸せにすることを考えましたね。でも、それ、本当？ だって、たとえばみんなが何も食べないで１ヶ月間勉強し続け、本や文房具ばかり買ってたら、皆さんはどうなる？　病気になることや、死ぬこともあるかもね。そうだね、極端な考えをしてはいけないんだね。	・今回は、まずどんでん返しを楽しみましょう。
展開	１．たとえば各国は、国の予算の中でどの程度を、実際に教育へ回しているか、いろんな国のやりかたを調べてみよう。何％くらいが平均かな？日本は何番目かな？ ２．ただし、教育費が少ないからその国の政府は子どもたちの幸せを考えていない、と言っていいだろうか？たとえば、虎三郎が藩士たちと話しているとき、大慌てで駆け込んできたある人が、「大変だ、洪水で、藩の真ん中に架かっている橋が今流されてしまった。明日からみんなは仕事にも行けないし、学校や病院へ行くことも、買い物もできない。今度のお米の中から半分でも今出してくれないだろうか？」と言ったら虎三郎はどうしただろうか？ ３．あるいは「お医者さんによると、最近、藩の子どもたちに病気が多いのは、栄養が足らないからだ、と聞きました。ならば、病気の子どもたちにだけ、今回のお米の一部を食べさせてあげたらどうだろう」という提案を他の誰かがしたとしたら、皆さんはどうしますか？ ４．人々が幸せになるためには、教育を忘れてはいけないけれど、それ以外の問題（インフラや医療）も大切だね。ほかには、どんな大切なことがあるだろうか？考えて、手を挙げて答えてください。	公的教育費の対 GDP（国民総生産）比率の国際比較統計（https://www.globalnote.jp/p-data-g/?dno=1000&post_no=1479）
まとめ	今あるものを将来の幸せために使う（教育）ことも大切だけど、今使うことも大切。そのバランスの取り方を考え、皆で正しく判断する必要があるね。その判断は難しそうだね。大切なことは、今１人ひとりが幸せかどうか、もし不幸せだったら、それをどうすれば解決できるか、１人ひとり具体的に考えていくしかなさそうだね。隣の友達のことを大切に考えるのが、一番の勉強（教育）になるかもしれないね。	

４．参考資料

ａ．山本有三『米百俵』新潮文庫、2001 年７月

ｂ．上杉 聰「『個』は国家を超える」『脱戦争論』東方出版、2000 年５月